

蝦夷通辞による アイヌ語版「お吉清三」口説をめぐって

千葉大学大学院 博士後期課程 1年
深澤 美香



※このスライドは、2013年1月31日に行われた千葉大学地域研究センター定例会において発表したものです。

誤植や不正確な記述については、一部変更を加えました。

(2013年10月24日、深澤)

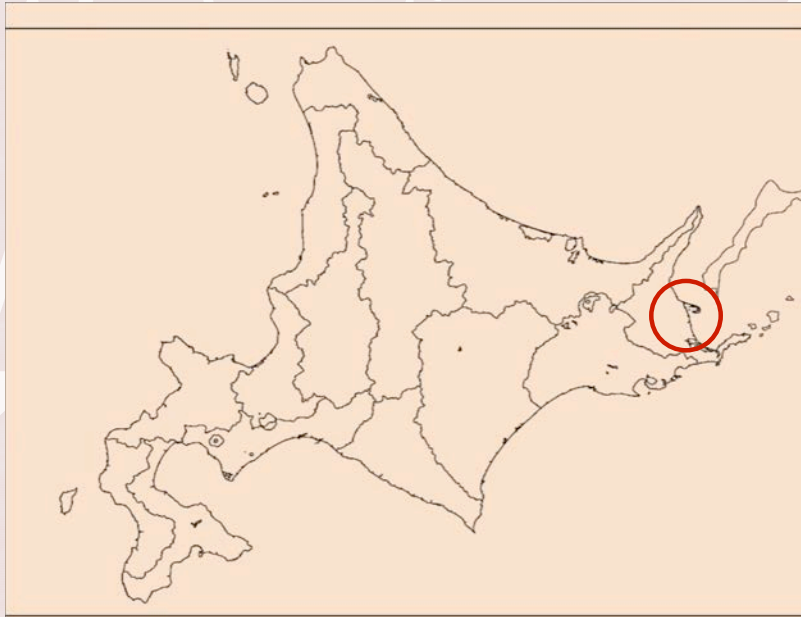
1

蝦夷通辞・加賀伝蔵

- 蝦夷通辞：江戸時代に北海道（蝦夷地）でアイヌ語と日本語の通訳をしていた幕府の用人のこと。
- 加賀家は北海道の根室場所で代々蝦夷通辞として活躍していた家系。書き残された資料は「加賀家文書」と呼ばれている。
- 加賀伝蔵は三代目蝦夷通辞であり、19世紀に活躍した蝦夷通辞の一人。
(※詳しくは、別海町郷土資料館 (2012)を参照のこと)

2

伝蔵が長年勤務していた
根室場所（野付）

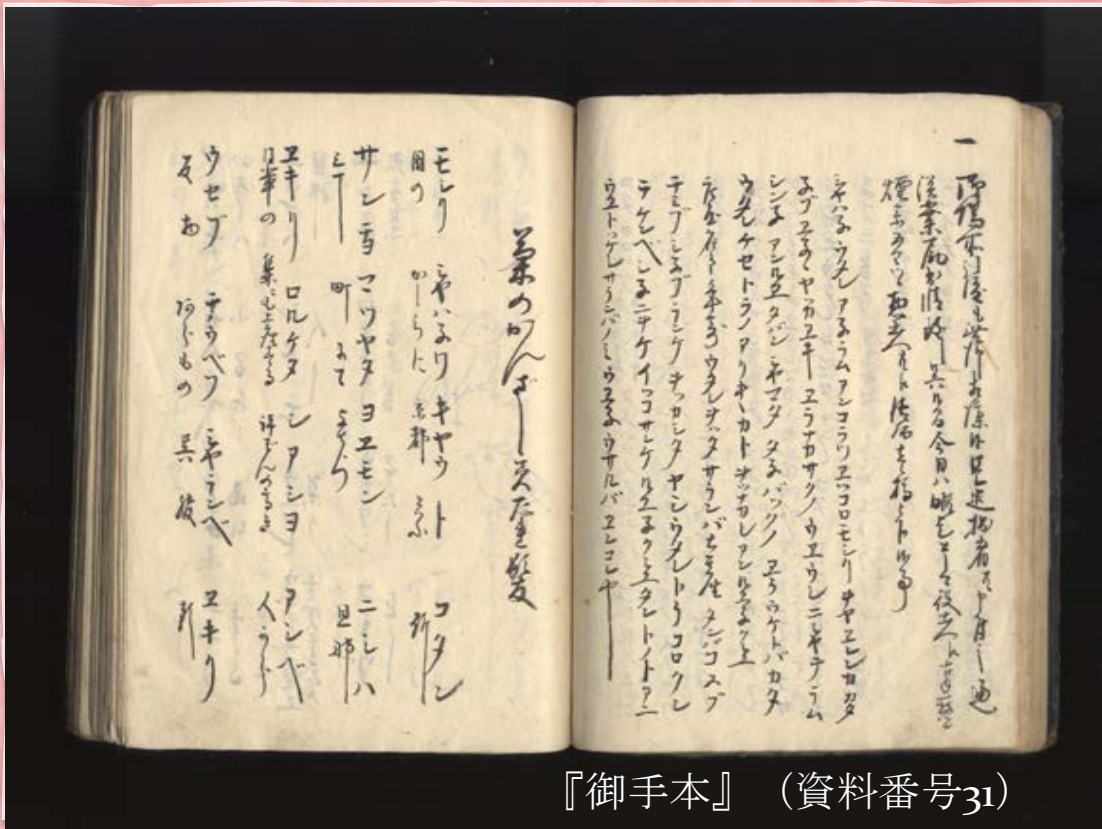


3

アイヌ語版「お吉清三」口説

- 「加賀家文書」のなかに「菊のかんざしみだれ髪」という題の歌詞が存在する。
- 「菊のかんざしみだれ髪」は、登場人物やストーリーなどの多くの点で「お吉清三」口説と一致する。
- 翻刻が1編と写本が2編確認できている。

4



『御手本』（資料番号31）

先行研究：加賀康三(1932)

- 加賀康三(1932)は、「おきつ清三戀の夜嵐」という唄の翻刻を試みたもの。
- 内容は、ほぼ「菊のかんざし髪」と一致するが特徴としては、以下の通り。
 - 1) 中盤で和訳が抜け、アイヌ語だけで記述されている箇所がある。
 - 2) 囃子の表現が附記されている。
 - 3) 付加情報が多い。

(原本は行方不明)

「菊のかんざしみだれ髪」

『蝦夷風俗図絵蝦夷語解説①他』資料番号 28	『御手本』 資料番号 31
● 一行抜かす等の書き誤りを修正した跡が見られる。	● 「アイヌ語の普及を図るためのもの」(別海町郷土資料館(2002))として編まれたもの。
アイヌ語部分：濁点の有無程度の違い。 (※アイヌ語には音韻的な有声・無声の区別が無い。) 日本語部分：異なる和訳がつけられている場合もある。	

加賀康三(1932: 54) の報告①

- 此の唄は、半紙四ツ切紙數綴込み拾參枚より成り、著作年月日は弘化二年巳 七月新板としてゐる。表題は「おきつ清三戀の夜嵐」で、傍注に朱書きで「千島なまりのヂヨンカラぶし」としてある。

加賀康三(1932: 54) の報告②

- 表紙裏面には「兼て御存知の如く秋田八森の不動様奉賀帳に多少御志なし下され候御若い郎へ爲御禮左の如くの唄を愚作し夫々献上致し候間幸い御尊前サル御場所へ御下相成候由御笑ひ草金壹匁代御禮奉申上度候」と朱書してあり、末文表紙には右の歌が書添えてある。

加賀康三(1932: 54) の報告③

- 「穴かしこ、人に見してはなほ笑い草定めなき郎の寢言なれとも」
- これが一冊は柴田政吉様へ加賀屋傳藏が差上げたのは實事で、唄の作者が傳藏なる事に思ひあたる。柴田政吉氏は士分で見廻り役勤番であつたらしい。以下唄の本文を一通り書く。(文中、島の圖あり、省略す)

参考資料

- 「菊のかんざしみだれ髪」
 - ◆ 『御手本』 (資料番号 31)
 - ◆ 「おきつ清三戀の夜嵐」 (加賀康三 (1932))
- 「お吉清三」
 - ◆ 『勸懲童之論』 (1883)
 - ◆ 『くどき五百段』 (1910)
 - ◆ 『瓦版のはやり唄』 (1926)
 - ◆ 「じょんがら節(お吉清三)」 (1929)
 - ◆ 「お吉清三」 (1978-1980) (板垣 (2009))
 - ◆ 『陸前伊具昔話集：宮城』 (1981)
 - ◆ 『やまがの盆踊り口説集』 (1986)

11

演唱のパターン比較

「じょんがら節(お吉清三)」 (1929)

(※国立国会図書館蔵の音声資料から発表者が文字化した。)

- くには きよーとで そのなも たかき

3 4 4 3

- みせも にぎやか くらしも はんじょー

3 4 4 3

- ひとり むすめに おきちと いうて

3 4 4 3

7音 + 7音の14音節(一コト)

= 口説の特徴と一致

12

演唱のパターン比較

「菊のかんざしみだれ髪」 (『御手本』)

- モシリ シヤハ子ワ キヤウ ト コタン
3 4 4 3
- サンチヨ マツヤタ ヨエモン ニシハ
3 4 4 3
- エキリ ロルケタ シアシヨ アシベ
3 4 4 3

7音 + 7音の14音節(一コト)

= 口説の特徴と一致

13

アイヌ語の音節数との齟齬

- 促音：ウワツテ (4拍)、uwatte (3音節)
- 拗音：ルシユイ (3拍)、rusuy (2音節)
- 音節末の子音：
キマテク (4拍)、kimatek (3音節)
- 撥音：クン子 (3拍)、kunne (2音節)
- 長音：ツセー (3拍)、cise (2音節)

→ アイヌ語の音節数では無く、カナ表記の拍数(モーラ数)で数えるため、7拍+7拍の14拍を一コトとしている

14

物語に見られるパターン化

(板垣 2009: 145)

- 口説の内容は一定のパターンによって成り立っている。
 - 基本的なパターンをふまえることで口説の作品はいくらでも創ることができた
1. 事件の場所の提示
 2. 人物の紹介 (類型的な美男美女)
 3. 事件の内容 (この部分がそれぞれの個性となる)
 4. 死の場面
 5. 人々の同情

15

1. 事件の場所の提示

「お吉清三」	「菊のかんざしみだれ髪」
<ul style="list-style-type: none">● 京都・三条● 糸屋 与[興]右衛門● 糸屋● 店もにぎやか暮らしも繁昌	<ul style="list-style-type: none">● キヤウトコタン サンチヨマツ (京都 三丁町 (三条))● ヨエモン ニシハ (与右衛門 旦那)● ウセブ チウベフ シヤランベ エキリ (反物、紐、絹織物をたくさん) ウサナ モムクベ ア子 エホク (様々な小間物を売る)● ニシハ シシヤモ ウエカレ ウコイ ホクハウエ (旦那和人が集り売買する声) エン子 ワヲチリ ウカワシ コラツ (数多のワヲ鳥が鳴き合(訳は深澤)による)

16

謎 1 ワオ鳥の登場

17

「お吉清三」本文

- 家もにぎやか 暮らしも繁昌 (板垣 (2009))
- 店もにぎやか暮らしも繁昌
(『くどき五百段』; cf. 『やまがの盆踊口説集』、『瓦版の流行唄』、「じょんがら節 (お吉清三)」はこれと同文)
- ばんとうてだいが七十五人。見せもにぎやか暮らしもはん志^ぎやう。(『勸懲童之論』)
- 蔵は十一、店の間口九間、出店に出たのが七十五軒もあった。そくらいの大構えなので、手代、番頭あわせて七十五人も頼んでいた。
(『陸前伊具昔話集』)

18

「菊のかんざしみだれ髪」本文

- ニシハ シシヤモ (nispa sisam)
旦那人々 (旦那和人が)
 - ウエカレ ウコイホクハウエ (uekari ukoihok hawe)
集り売買する声 (集まり売買する声)
 - エン子 ワヲチリ (inne wawocir)
数多集ワヲといふ鳥 (多くのワオ鳥が)
 - ウカワシ コラツ (ukohawasi koraci)
声たしことく (互いに鳴くように)
- ▶ワオに例えたのは何故か？

19

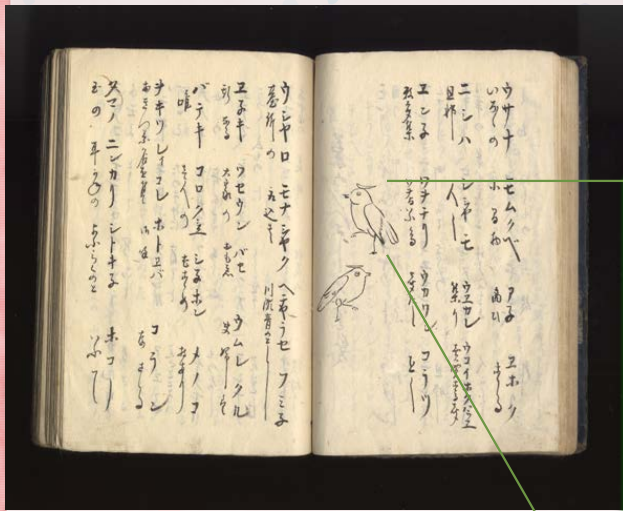


アオバト

「徒然野鳥記：第90回 アオバト(2009/05/01)」より
<http://www.cec-web.co.jp/column/bird/bird90.html>(2013/01/22 アクセス)

20

「菊のかんざしみだれ髪」のワヲの挿絵



まげ(鬘) ?



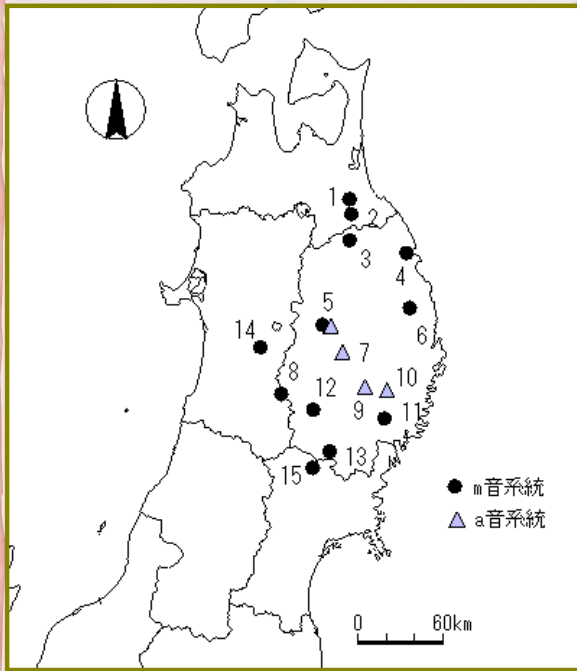
21

「ワオとマオ：小鳥になった人」(三浦 (2012))

- 「昔話「馬追鳥」と神謡「ワオ」との関係は、比較的あたらしい時期、十九世紀前半の、東北とアイヌとの接触によって生じたものだった」
- ▶ 東北の「馬追 (マオ)」にまつわる伝承が蝦夷地に伝播したというのが事実だとすれば、「菊のかんざしみだれ髪」に「ワオ」が登場することをどのように考えたらよいだろうか？

22

アオバト「聞きなし」分布図（三浦 2012）

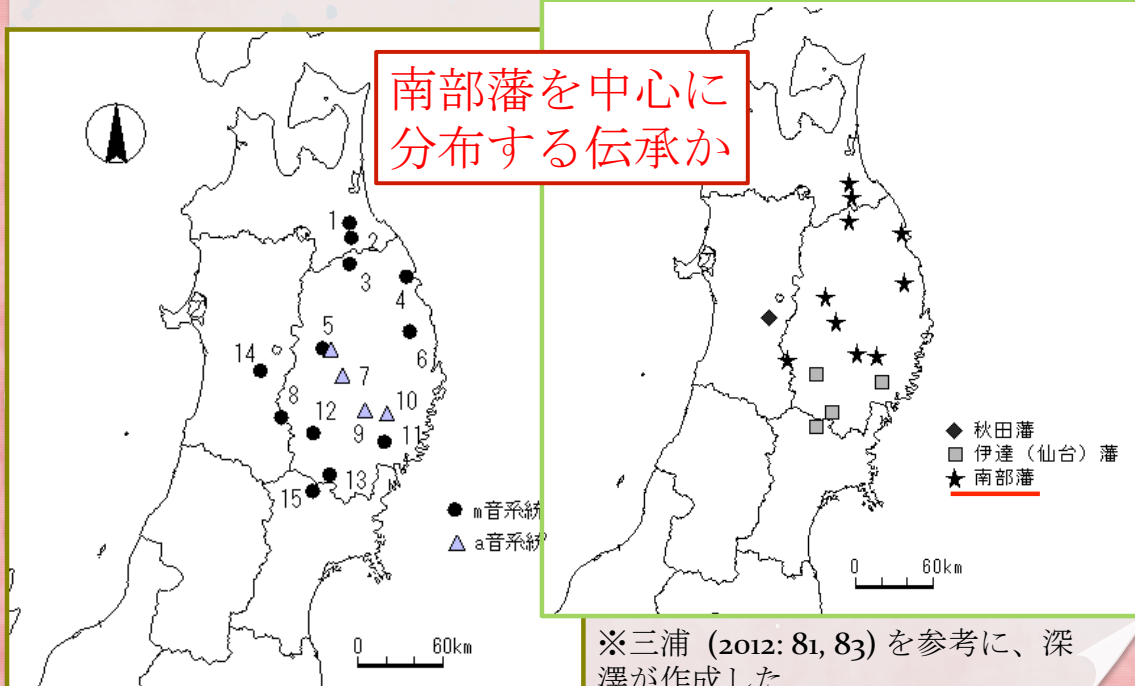


● m音系統：
マオマオ、マオー、
マーオー、ンマオ
オウ、など

● a音系統：
アオー、アホアホ、
アーホー、など

※三浦 (2012: 81) を参考に、
深澤が作成した。地図ソフト
MANDARA を使用。

アオバト「聞きなし」分布図（三浦 2012）



南部藩を中心に
分布する伝承か

※三浦 (2012: 81, 83) を参考に、
深澤が作成した。

伝播の2つの可能性 (三浦 2012)

1. 幕末期におけるアイヌと南部藩の関係によるもの

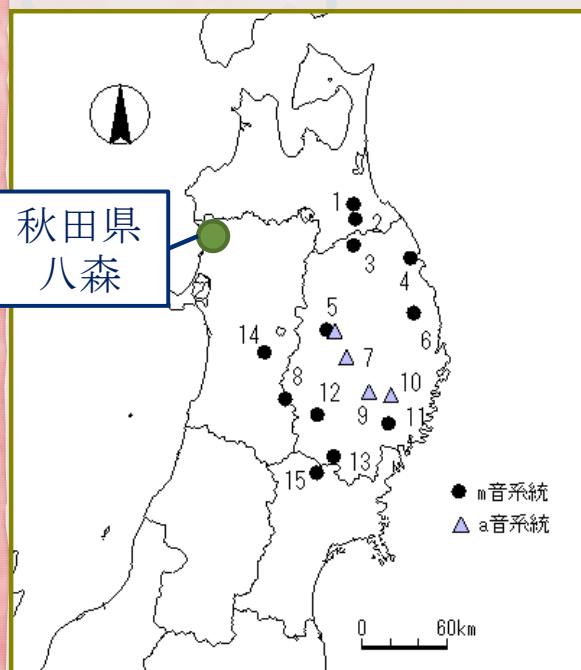
- ① 南部藩の兵隊がアイヌとの交流のなかで、アオバトの鳴き声 (マオ・ワオ) を介して「馬追 (マオ) 鳥」の話を伝えた
- ② 仙台藩などその他の藩がアイヌへ伝えた。

2. 直轄地政策とは別の南部と東蝦夷地の関係によるもの (例: 下北の和人の経済活動)

▶ 神謡「ワオ」に登場する和人が *yamanko* (山子・柚子) や *cipta sisam* (舟大工の和人) と描写されることとも関連する

25

アイヌの神謡「ワオ」による影響?



理由

- 伝蔵の出身地とマオの伝承地域が一致しない。
- 伝蔵は秋田藩である。
- 和人とアオバトを関連づけているのは、神謡「ワオ」のほうであり、「マオ」はそれとは関係しない。

26

神謡「ワオ」三つのタイプの由来譚 (三浦 2012)

- A) 木（船材）を切るために山に入った和人が道に迷い、寒さと飢えのために死んで、そのチョンマゲがワオという鳥になった。
- B) ワオが村人に洪水が乗るのを知らせ、救われた人びとによって大切な神として祀られることになった。
- C) 巨大なワオが、オキクルミやサマイユンクルの制止を聞かずに好奇心から本州の和人の村へ行き、木のイナウではなく、紙の幣で祀られたために神の国へ戻れずに小さなワオになった。

27

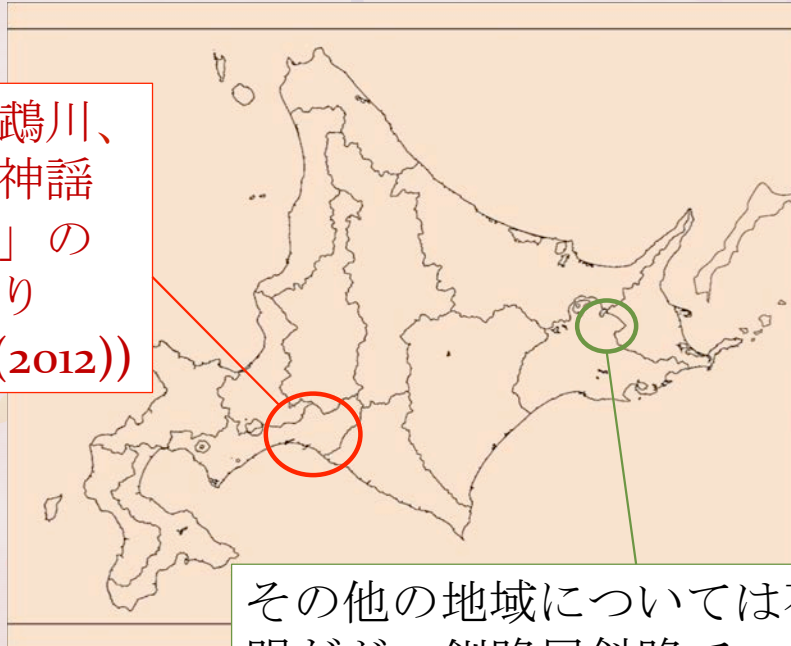
検討事項 1 : 神謡「ワオ」の成立時期

- 「菊のかんざしみだれ髪」：加賀康三 (1932) の元本によれば、弘化二年巳 [巳] 七月 (1845年8月) に「新板」として成立。
- ▶ 神謡B、C：別の鳥や動物の伝承としても語られている話型。
- ▶ 神謡A：「ワオ」に特徴的な話型。「十九世紀前半の、東北の和人との接触」から神謡の成立までに多少の時間を要した可能性はないか？

28

検討事項 2 : 神謡「ワオ」の分布域

千歳、鷓川、
平取に神謡
「ワオ」の
伝承あり
(三浦 (2012))



その他の地域については不明だが、釧路屈斜路で...

29

検討事項 2 : 神謡「ワオ」の分布域

● 神謡Aタイプの伝承 :

「この伝承は広く各地に伝えられている。釧路屈斜路でもこの鳥をワオーといっているが、ワオーとは莫迦という意味で、やはり山で迷った和人の魂が、死んでからも自分たちを莫迦にして「ワオー ワオー」というのだと伝えられている」

(『コタン生物記』(1977))

30

2.人物の紹介 (類型的な美男美女)

「お吉清三」	「菊のかんざしみだれ髪」
<ul style="list-style-type: none"> ● お吉 ▶年齢：16歳 ▶「優し姿は 花にはまさる」 ▶「今咲く花よ」 ▶「なにほどの分限にもたんと出ないというほどの器量よしで」 	<ul style="list-style-type: none"> ● ヲキツ(おきつ) ▶年齢：不明 ▶「タマノ ニンカリ シトキ子 ホコノ」(玉の耳輪 シトキのようで) ▶「アブカ ホトエバ ノマンヘ コラツ」(雄鹿を呼ぶ雌鹿のごとく) ▶「ヲツカエ エコカレ ユニンカメノコ」(男を巻き付け 怪我させる女)

2.人物の紹介 (類型的な美男美女)

「お吉清三」	「菊のかんざしみだれ髪」
<ul style="list-style-type: none"> ● 清三 ▶年齢：20-22歳 ▶「男の盛り」 ▶「諸人に愛嬌」 ▶「器量良ければお吉が見染め...」 ▶「読んで、書かせて、筆とらせても誰にもひけとらなかつた」 	<ul style="list-style-type: none"> ● セイザ(清三)/セイザコ(清三子) ▶年齢：不明 ▶「エラ、アエカブ トノブリ コロベ」(そんなことができると思えない殿方らしき態度の者) ▶「カンビ ソロバン イハカシ クル子」(読み書き、ソロバンを教える物である) ▶「ヲベカ ケウトモ ナンカテ シシヤモ」(実直な心持、美男の和人)

特徴的な相違点

- 「菊のかんざしみだれ髪」は、年齢描写を欠く
 - ▶拍数の問題か？（例：十六歳はアイヌ語で「イワン パ イカシマ ワン パ(iwan pa ikasma wan pa)」）
- 「菊のかんざしみだれ髪」のほうが美男・美女描写のコト数が多く、人物プロフィールを丁寧に描いているように見える。（例：ヲキツ（お吉）が男を狂わせるほどの魅力をもった女で、両親に大事に育てられたという描写が増える。）
 - ▶伝蔵によるアレンジか？

33

3. 事件の内容

「お吉清三」	「菊のかんざしみだれ髪」
<ul style="list-style-type: none">● お吉と清三が恋仲になる● 親の耳に入る● お吉を呼び出し問いただす（お吉は否定する）● 清三を呼び出し、出て行くように申し付ける● 清三は反論せず、出て行く支度をし、別れの挨拶をして、家から立ち去る	<ul style="list-style-type: none">● ヲキツが怒りから両親への態度が豹変する● 両親がそれを見るに見かねて思い直し、菊屋へ「償」を差し出す。
<ul style="list-style-type: none">● 清三はお吉を想って病気になる● お吉が清三を追って菊屋に行く● 清三の死を知る	

34

4. 死の場面／結婚と出産の場面

「お吉清三」	「菊のかんざしみだれ髪」
<ul style="list-style-type: none">● お吉が清三の墓参りに行く● お吉の思いによって墓が2つに割れ、そこから清三が現れる● お吉が身投げする	<ul style="list-style-type: none">● フキツとセイザを結婚させる● 男と女の子ども（ヨエモンの孫）が生まれる

5. 人々の同情／喜びの共有

<ul style="list-style-type: none">● それを見聞きした人々が同情する（伝聞形式）	<ul style="list-style-type: none">● ヨエモンは目を覚ましたかのように、孫たちを可愛がる
---	---

謎 2 表題「菊のかんざしみだれ髪」 の由来

表題「菊のかんざしみだれ髪」の謎

- 「菊のかんざしみだれ髪」に、「菊のかんざし」というモチーフは登場しない。
 - 加賀康三(1932)の底本の時点では「おきつ清三戀の夜嵐」だが、写本2つはいずれも「菊のかんざしみだれ髪」という表題。
- ▶元になった「お吉清三」口説に何かヒントがあるのではないだろうか？

簪（かんざし）が出て来る唯一の例

- ちょうど一周忌、家の人達が数珠をたがえて拝んでいたが、それでは寺へと、お吉ともども寺へ行き、お吉は掛けたおかせと花とあげ、簪を線香のたとえにあげて、「申し上げます、もし清三さん」と墓を拝むと、墓石とりあげ清三が現れ、「おれを想わば、香華手向けて、供養忘れずしてくれろ」といってガラリ消えてしまった。

(『陸前伊具昔話集：宮城』)

「お吉清三」同一箇所と比較

- 去らば是から墓所へ参り、たてた塔婆にすがりて泣けばひとの思ひは恐ろし者よ、せい三墓所は二ツに分れて、... (『くどき五百段』)

※『瓦版の流行唄』と『やまがの盆踊口説集』はこれとほぼ同一文。『勸懲童之論』も内容に大きな変更はなし。板垣(2009)では、「妻が来たぞや のう清三さん／もとの姿で会わせてたまえ」というセリフが入る。

もとにした「お吉清三」の特定

- 可能性1：『陸前伊具昔話集』の「お吉は掛けたおかせと花とあげ、簪を線香のたとえにあげて」のようなくだりがある話をもとにしている。
- 可能性2：お吉が「菊のかんざし」をつけている描写がある等、全く別の類話をもとにしている。
- 可能性3：その他。(清三の実家が「菊屋」であるということからの単なる類推か?)

▶可能性1だとすれば、清三が生き返らない限りハッピーエンドにはならない。

ハッピーエンドへの変更

- 「「鈴木主水」が江戸を舞台とする代表的な口説だとすれば、本作は京阪を舞台とする代表的な口説」(板垣 2009: 165)
 - 「お吉清三」は、もともと「心中口説」であり、伝蔵がアイヌ語で作詞した際、ハッピーエンドに変更したのではないか。
- ▶何がハッピーエンドへ変える動機となったのか、元になる類話があるのか、更に調査が必要である。

謎 3

「お吉清三」の伝播と
「菊のかんざしみだれ髪」の成立背景

伝播に関わる記述

- 「お吉清三」の音頭口説の分布が西日本に偏っていることからすると、瞽女口説よりも古い兵庫口説にすでに歌われていたものかも知れない。(板垣 2009: 165)
- 「「悪玉御膳」「桔梗の前」「お吉清三」などは、山里※を訪れて来る瞽女や祭文語りによって、語り伝えられたものにちがいない」(山本 1981: 289)
※宮城県丸森町筆甫のこと。

伝播に関わる記述

- 小泉八雲によれば、この口説が流行したのは天保年間(一八三〇～四四)であったという(「日本の古い唄」)。これは(やんれ節)口説によって再流行したときのことであろう。
- 江戸の唄本としては、吉田屋小吉発行の「於吉清三しんぢうくどき」(全四丁)などがある。
- この長文のものは、「お吉精三口説」と呼ばれる、「読売り」が唄い広めたものである。(竹内 2002: 555)

「お吉清三」の伝播（推定）

- （新保広大寺口説）



- 兵庫口説(?)



- 瞽女口説/ 読売り節（瓦版）



- 盆踊り唄/ じょんがら節/ 昔話

（青森県(津軽)・石川県）

「菊のかんざしみだれ髪」の特徴

- 「菊のかんざしみだれ髪」は七七調
- 「やんれー」で結ぶ「（やんれ節）口説」等の特徴が見られる
- 「千島なまりのデヨンカラぶし」と記されている

▶口説が読売りなどによって広められ、それが津軽のじょんがら節（七七調・ヤンレなどの特徴あり）になったのだとすれば、伝蔵はそれを参考にしたのかもしれない。

蝦夷地の和人芸能文化

- 事例11には、武四郎が弘化二年（一八四五）六月頃に東蝦夷地口場所の「レブンキ」に宿泊した際、その宿の人から、熊よけの「梭尾螺」（ほらがい）を持っていたために「祭文語り」と間違えられたこと、事例12には、弘化三年（一八四六）七月に西蝦夷地奥場所のシャリを訪れた際、場所の番人と支配人が都々逸を「松前訛り」で歌っていたこと、が記されている。（三浦 2007: 104）
（※事例11、12は『校訂蝦夷日誌』による）

47

蝦夷地の和人芸能文化

- 「祭文語り」と間違えられた：
 - ▶ 「お吉清三」は祭文語りによってうたわれたこともあった可能性があり、全く無関係の事例とも言いきれない。
- 都々逸を「松前訛り」で歌っていた：
（都々逸：「七、七、七、五」の節回しと三味線で演じられ、恋情などを歌う特徴。）
 - ▶ 「千島なまりのデヨンカラぶし」を作詞した背景に近い

48

蝦夷地の和人芸能文化

- また、武四郎は、エトロフ島のナイボなるところの記述のなかで、文化四年（一八〇七）四月にロシア戦に捕えられた大村治五平の「口書」を引用しているが、そこには、ロシア人二十余人が「何れの場所」へか上陸し、家から「油一樽、三味線一挺、薄縁壺一枚、鮮魚少々」を奪ってきたことが記されている。

（三浦 2007: 104；下線は原典ママ）

49

蝦夷地の和人芸能文化

- 「蝦夷地への「芸能文化」の広がりには武四郎の時期よりもさらにさかのぼることが想定される」（三浦 2007: 104）
 - 吉田（1989）に、釧路市春採で「しあみせん shamisen（春）三味線（謡り物にある）」という借用語の記録がなされている。
- ▶このような「芸能文化」が蝦夷地に深く入り込んでいた時代であったことが随所にうかがえる。

50

おまけ：囃子ことば (加賀康三(1932))

附記あり

○卯たの間に所々はやし有左の如し
ヤーコロ、コロクル、ドツコエ、サヲトリ、マウカタ、
(yakor, kor kur, DOKKOY(?), SAOTORI(?), maw kata)
網を掛ける、その長が、どっこい、竿取り、風の上
に、

コ、ムセ、ソノテデ、ユルシカ
(kokomse, SONOTEDE(?), iruska)
けいれんする、その手で、怒って

シントク、タタクワシ、テウツケヲビツレ、ノキタマ、
(sintoko, TATAKU WASHI(?), [teke(?)] opicire, noki
tama)

シントコ、叩く私、手を放してやり、鞆丸

51

トモシマグタ、酒チャラセワ、セルバナ、
(tumsi (tomus?) mak ta, SAKE carase wa, serupa na.)
その房の裏に、酒が流れて、むせたよ。

ビリバナ、カツバノ、血クタ、キナカタ、ヌタバタ、
(pirpa na, kappa NO(?), CI kuta, kina ka ta, nutap ta,)
それを拭いて、河童の、血をそそぎ、草の上に、川岸に

囃まだ二三あれ共畧す

※伝蔵による和訳無し。アルファベット・和訳は深澤に
よる。この囃子については不明な点が多く、2種の写本
「菊のかんざしみだれ髪」では全てカットされている。

52

参考文献

- 板垣俊一 (2009) 『越後瞽女唄集』東京：三弥井書店。
- 加賀伝蔵筆録 (1844~1863(?)) 未発表資料「菊のかんざしみだれ髪」『御手本』加賀家文書館所蔵 (資料番号31)。
- —— (年代不詳) 未発表資料「菊のかんざしみだれ髪」『蝦夷風俗図絵蝦夷語解説①他』加賀家文書館所蔵 (資料番号28)。
- 加賀康三 (1932) 「おきつ清三戀の夜嵐」について『蝦夷往来』8. 札幌：尚古堂。
- グローマー、ジェラルド (2007) 『瞽女と瞽女唄の研究 研究篇』名古屋：名古屋大学出版会。
- 更科源蔵・更科光 (1977) 『コタン生物記Ⅲ：野鳥・水鳥・昆虫篇』東京：法政大学出版局。
- 竹内勉 (2002) 『民謡地図②じょんがらと越後瞽女』東京：本阿弥書店。
- 探花房 (1883) 『勸懲童之論』金沢：近八郎右衛門。
- 別海町郷土資料館 (2002) 「御手本」『加賀家文書 現代語訳版』2: 13-54. 別海町：別海町郷土資料館。
- —— (2012) 『別海町郷土資料館所蔵資料目録第1集 加賀家文書等資料目録 I』別海町：別海町郷土資料館。

参考文献

- 三浦佑之 (2007) 「近世中後期の北日本における旅芸人覚書：松前・蝦夷地及び弘前藩の事例を中心に」『北海道開拓記念館研究紀要』35: 101-144. 札幌：北海道開拓記念館。
- —— (2012) 「ワオとマオ：小鳥になった人」『古代研究：列島の神話・文化・言語』79-104. 東京：青土社。
- 三田村鳶魚 (1926) 『瓦版のはやり唄』東京：春陽堂。
- 山香町文化連盟 (編) (1986) 『やまがの盆踊り口説集』山香町 (大分)：山香町文化連盟。
- 山本明 (1981) 『陸前伊具昔話集：宮城』東京：岩崎美術社。
- 湯浅条策 (1910) 『くどき五百段』東京：春江堂。
- 吉田巖 (1989) 『北海道あいぬ方言語彙集成』東京：小学館。

【音声資料】

- 和田如月他 (1929) 国立国会図書館デジタル化資料「じょんがら節 (お吉清三)」東京：ビクター。